

9. 霊の結ぶ実は柔和

1. ピラトがキリストに向かって「真理とは何か」と聞いたとき、わたしは天からくだって来た、パンである、真理であると言った、真理なる神が、ピラトの目の前に立っていました。ユダヤ人たちは叫びつづけました。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」

キリストの周りには、怒号（どごう、おこって大きな声でどなること、また、その声）がとびかっています。理不尽な（りふじん・な、すじが通らないことをやりとおそうとすること）むごたらしさ（残忍性）に根負け（相手と張り合う気持ちがつきてしまい、あきらめること）して、ピラトはすべての忍耐を失ってしまって、絶望の淵から大声をだしました。「おまえたちが、この人を引き取って十字架につけるがよい。私はこの人に、何の罪も見出すことができない。」

ピラトは、キリストが何の不平・不満を言わない・忍耐深さに驚いて、その驚きに圧倒されていました。ピラトは自分自身が、キリストについて、またキリストのミッション（伝道使命、任務）についても、まったく何ひとつ知っていなかったことに今更（いまさら、今はじめてわかったように、あらためて）はっとして目覚めました。（DA 736）

ピラトは大群衆の、がやがや・さわぎ・激情を見下ろしていました。そこには、大海に浮かぶ、数え切れないカボチャが見えました。カボチャとは、ピラトを見上げた、顔・顔・顔です。

キリストはというと、かれひとりが平和に満ちていました。ピラトは、恐怖と良心のとがめを限りなく感じながら、じっとキリストを見つめました。やわらかな光が、かれの頭のまわりに輝いているように思われました。ピラトが、心のなかで、そっとつぶやきました。かれは・神・だ！！それから、ピラトは群集の方へ向き直って、手を洗いました。（DA 738）

エレン・ホワイトが、つぎのように書いています。：「かれら（群集）の狂気が、キリストを拷問にかける

人々を墮落させて、その人間性をますますサタンに似せて行くこととは反比例に、キリストの柔和と忍耐は、かれの人間性を高めて、キリストが神と共に王であることを証明しています。」（DA 934）

2. 私は「柔和」という訳語が大嫌いです。なぜならば、この訳語が、クリスチャンの人物像を正しくとらえている言葉とは到底（どうてい）思えないからです。

2.1. 柔和、にゆうわ、やさしくおだやかなようす。

2.2. Meek, quiet, gentle, and easily persuaded by other people to do what they want. 柔和、穏やかな、心優しい、そして他の人々によって、かれらが・したいことを・するように、たやすく説得される。

「穏やかな、心優しい」を受け入れることができます。けれども、このあとの「そして・・・たやすく説得される」を、断じて（だんじて、決して、絶対に、何があっても必ず）承諾することができません。

3. パウロの「柔和」は、次の聖句です。：私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いが、あなたがたは強いのです。あなたがたは榮譽を持っているが、私たちは卑しめられています。（1 コリ 4:10、新改訳）

ここでパウロが、ユーモアを含んだ穏やかなアイロニー（ことばの表面上とは反対の意味をもたせて言う皮肉。反語法。）によって、コリント教会の人々の、非クリスチャン性を丸裸にしています。

パウロが、エペソの教会の人々に勧告しています。：主にあって、その大能の力によって強められなさい。

（エペ 6:10、新改訳）ほかの訳では、「その偉大な力」。新約聖書には少なくとも四種類の「力」の言葉があります。このギリシア語の（クラトス）は、身体的な力です。全身にみなぎる力です。心とからだの健康があって初めて、あふれてくる力です。それも「キリストにあって」ですから――すべての電気器具に、電源が無ければ、ただの箱であるように、クリスチャンがその力の源である、御子なる神、キリストにつながっていないならば、到底喜びと力にあふれるクリスチャン人生は望めないでしょう。